

●<分科会報告> 第1分科会「グリーンツーリズム 農家民宿で農村再生」

協会コーディネーター 谷内博史：

農家民宿で農村再生ということで話をしました。副題に「月収40万円の仕事づくりができるか」ということが付いています。分科会が始まる前にはそのためのノウハウを話すのかなと聞いていましたが、決してそんな薄っぺらい話ではありませんでした。

立命館大学のカゼム先生の学生が春蘭の里に2週間インターンシップをしていました。暮らしながら、グリーンツーリズムや農家民宿を滞在しながら体験していました。私が朝9時に到着した時にはご飯を食べていました。まずはその姿に圧倒されました。会場の準備も何もあったものではなかったです。場所を間違えたかなと思ってると多田さんが来て、「あー来た来た。これから座布団を敷くさかいに」。布団もまだ敷いてありましたが、扉を外して一気に会場づくりに入りました。そこに座布団をぱっぱと敷いて、みんなが手伝っていました。私も一緒にやりましたが、農家民宿ってこんなことなんだろうなと思いました。お客さんじゃないんですね、自分が主人公になれると言いますか、朝から気持ちがよかったです。

分科会が始まりまして、ツーリズムの専門家の方、農業をどう6次産業化するかという専門家の方にお話しいただきましたが、実はみなさんはもう2年以上、春蘭の里に何らかの関わりを持っている人ばかりです。ホスピタリティツーリズム専門学校の先生は、毎年、春蘭の里に学生を送り込んで学んでもらっています。今まで上目づかいで人と話していた学生が多田さんに注意されて、「俺の目を見て話せるようになるのが課題だ」とずばっと言われ、はきはきと明るい表情に変わって帰っていったという話もあります。

後半ではインターンシップに来ている学生さんに感想を聞きました。「将来、地元に戻って観光の仕事がしたいけれど、多分キャビンアテンダントを目指します」という学生もいました。それが現実だという話も出ました。つまり小さい頃から「田舎に行って仕事をして」ということを教わらないと、そういう選択肢は生まれてきません。月収があるかということも大事ですが、そこに仕事があるから戻ってこようという教育が今の社会システムの中にはないという話もありました。

ホスピタリティツーリズム専門学校の卒業生で、春蘭の里に移り住んでしまった台湾出身の若者がいます。多田さんとの出会い、春蘭の里の皆さんとの出会いの中で、こんなに人が優しい、こんなに居心地がいい場所はなかったと思ったそうです。「自分はここで働きたい、何とかありませんか」と頼んだら、「わかったよ、来い」といって置いてもらうことになったそうです。

人との出会いの中で自分を発見し、ここで暮らし、地域を支えていこうという若者が増えています。今日も会場にいらっしゃいますが、農家民宿を始めた20歳代の兄弟の方がいます。木村兄弟です。

協会コーディネーター 谷内博史、進行役 濱 一博：

農家民宿をやって何がよかった？

木村（兄）：民宿「きむら」を経営しています、長男の木村しんやといいます。まずは、人と人とのふれあいを大事にしています。一泊二日の中でどんなふうに人とのふれあいがあるのか最初は不安でした。私はお酒が好きなのですが、多田さんの家で飲み会があったり、自分のところでもお客さんと和気藹々と飲むうちに人と人とのつながりができて、絆ができたところが嬉しいと思っています。今ではホスピタリティツアーリズム専門学校の高橋先生と台湾から来たワンさん、ワンさんの奥さんのセンちゃんなど、多田さんのお陰で若い人たち、東京の人たちとも出会えて、交流できて嬉しいです。いろいろな人と交流ができたり、一緒に田植えや畑仕事をして、喜んで帰ってもらえます。嬉しいのは人口が増えたこと。宮地地区に観光バスが来ることはめったにないことです。外国からも来て、農業体験や修学旅行もあります。帰る時にはバスから大きく手を振っています。感謝して帰ってもらうことが本当に素晴らしいなあと思います。



協会コーディネーター 谷内博史：

分科会ではそういった若者の生の声を聞かせてもらいました。しかし、彼が言うには、来てくださった時は人口が増えて嬉しいけれど、帰る時はこんなに寂しいものか、また元の村に戻ってしまうのかと。その悔しさ、悲しさ、寂しさをバネに希望に満ちながらやっていることが伝わってきました。

30年振りにキリコを出す祭りができたそうです。来年はいよいよ大きいキリコも出して、200人の中学生とキリコを担ぐそうです。地元の人と一緒にやらないといけません。志賀町で農家民宿を始めた方が「どうして、地元の人をそんなに巻き込めるんですか」と質問されました。農家民宿の人だけががんばっているのではないんです。会長さんがお手紙を紹介されました。会長さんは野菜を提供されています。野菜だけを提供する人がいたり、実際に泊める人がいたり、お料理する人がいたり、お手伝いする人がいたり、近所の親戚がいたり、いろいろな応援があって、農家民宿での宿泊や体験が成り立っています。そういう地域のつながりがまるごとあるのだと思います。

第1分科会が一番国際的だったのではないかと思います。インターン生はタイからも来ていましたし、台湾からはワンさんも来ていましたし、輪島からは台湾から移住して起業された女性もいました。地域のことをやっていると、世界的に通用する価値があるということを強く感じました。

進行役 濱 一博：

カゼムさんは日本の農村の素晴らしさをどのように思っていますか？



ゲスト カゼム：

日本に来て10年くらい。観光が専門です。観光でどんな地域づくりができるか、観光でグリーンツーリズムなどです。いろいろな国で田舎の問題、仕事の問題がありますが、一番のベースは農業です。今は農業だけでは生活できない。日本だけではなくて、世界においてもそういう状態になっています。大きなトラクターなどを使った大規模農家など、今、タイから安いお米が入ってきています。米作りだけではやっていけません。

農業は文化です。日本の文化はもともと農業で、家族でものを作って生活していました。戦後は田舎から都市部へ移住しました。日本の素晴らしい田舎文化を紹介し、どういう可能性があるかを追求するのは、田舎観光のミッションです。農業の文化は観光で紹介できます。この貴重な文化は体験できますが、日本でのモデルケースは少ないです。

私は2年半ほど石川に住んでいました。今は別府市に住んでいます。立命館アジア太平洋大学の研究で春蘭の里にやってきて、素晴らしいコミュニティ観光の地だと思いました。1年以上、春蘭の里で勉強しました。その後は里山里海の研究、世界農業遺産の観光など。スリランカやフィリピン、イタリアのローマなど、世界農業遺産の特別なノウハウ、特別な農業があるかを見に行きました。

今の若い人は田舎の生活を知らないから興味をもちません。田舎には戻らないけれども、小学校から情報やトレーニングがあれば、農業のある田舎の生活が可能です。

全国でモデルケースとして石川のことを発表しています。世界中で日本の田舎観光のモデルの発表をします。これからもみんなで地域のため、がんばりましょう。

協会コーディネーター 谷内博史：

先ほど、地元で観光の仕事がしたいけれど航空会社に就職するわ、と言っていた彼女について補足します。彼女も本当は地元で就職したいんです。しかし、仕事がありません。私たちがやっている地域づくり円陣では、そんな彼女が帰って来られる地域をどうやってつくるかを考える場でもあります。

多田さんが分科会の最後におっしゃったことがあります。かつて田舎は次男坊や娘

さん、田舎でしっかり道德教育された若者を都会へ送り込んで、日本の経済成長を支えてきた。かつて田舎から都会へ出て行った人たちを受け入れる、将来ここで仕事ができるかも知れないという感覚が求められます。

カゼムさんも世界中で能登のよさを発信してくださっています。のとキリシマツツジの話も世界各地でしていただけたらと思います。

進行役 濱 一博：

第1分科会の報告を聞いていて、今回の地域づくり円陣のテーマである「光をあてる 磨きをかける 未来につなぐ」の「未来につなぐ」に近づいてきていると思いました。地域の中での仕事づくりです。今まで会社に勤めるのが仕事であり、朝からどこかへ行って5時くらいに帰ってくる、毎月サラリーをもらう。それが仕事であり、それがないと暮らしができないというふうに、みんな罫にはまっています。そんなことしなくても、月収40万円の暮らしができるじゃないかと。どこかに勤めて働くという呪縛があると、先ほどの話のようにキャビンアテンダントになるしかありません。

カゼムさんの「真ん中に農がある暮らしが文化」という言葉は名言です。今まで出た地域の宝はこんなにあります。(分科会ごとの報告を模造紙にまとめたもの。) コミュニティ、仲がよい集落が観光資源になるとは。隣の人と仲良く暮らすことで、観光の人が来る、観光客が増えるなんて信じられないでしょう。でも、カゼムさんは「なりますよ」と言ってくれています。今の新しい考え方、やわらかい考え方です。もっとかたい考え方だと、農業の技、まつり、風景。風景は第2分科会ですね。駅舎や田園風景、千枚田など。プチミュージアムのところでいえば、「しまわれていた家宝(のとキリシマツツジなど)」。これをミュージアムとして出していこうということです。観光資源になります。あとは道德教育というものが報告にありました。このあたりが地域の宝になって、光をあてられそうだとということになっています。これにどうやって磨きをかければいいのかということをお皆さんでやらないといけません。

自信をもって伝えないと観光資源にはなりません。自信をもって相手に伝えていくと、観光資源になります。自信とは、人に正々堂々と言うこと。伝えるとは、人に云うこと。分科会報告を聞いていてそう思いました。これは「ガッテン」していただけますか？私の話は言い過ぎですか？塚さん、どうでしょうか？



コーディネーター 塚 正浩：

自慢するという言葉がありますが、自分がいいんだと思うことを一生懸命伝えてい

くことは大事だと思います。「どうしてこの人、熱心に語るのか。情熱を傾けられるのか」ということになってきます。それがその人の魅力になる。魅力があると人が来ます。地域の魅力をたくさん語れる人がいることが能登の魅力であると私は信じます。みなさん、ぜひ自信をもって伝えて、能登の魅力を発信して行ってほしいです。さらに情熱をもって語ってほしいと思います。

進行役 濱 一博：

情熱をもって宝を語れると、これが魅力になる。いい話がいっぱい出ます。今日の名言だと思います。

山崎さん、先ほどは3分科会で話し合ったことを内緒にして報告をやめましたからね。

コーディネーター 山崎昭宏：

具体的に苗木をどう販売するかという話が出ました。お金に換えるというところでですね。苗木は市場流通の価格があります。普通に苗木を買くと、のとキリシマツツジは300～400円程度。産地として作る量をコントロールして、自分たちで価値を認めて、それを言い切って売ることができれば、自分たちで価格をコントロールできるということです。300円、400円に合わせる必要はなく、場合によっては1000円でも売れるということです。血統書のようなIDナンバーがついてくると、また別の価値基準になります。情報や情熱はものを売るときの強みでもあります。

進行役 濱 一博：

信じていないと情熱も出ないということですね。のとキリシマツツジは今までふつうにあり過ぎたので、これから見直していこうということですね。第3分科会としては「磨きをかける」の結論は何でしょうか？

協会コーディネーター 赤須治郎：

のとキリシマツツジは市場の洗礼を受けていません。市場がありません。数寄者の間で価格が左右されており、地域で自分たちはこれくらいでという主導権は持っていません。それをもったらいいのではないかということ、今、みなさん思い始めています。

コーディネーター 山崎昭宏：

例えばライオン。「13・85・515万円」のライオンがある。13万円は殺して皮をとった手数料、現地の取り分です。殺すとモノとしての価値が消えてなくなります。85万円はサーカスや動物園などに売る生体の価格。515万円は生きたまま保全してサファリツアーで見せる。観光ツアー化は消えてなくなる。現地の人のガイドとしての人件費、宿泊、輸送機関、お土産などを含んだ値段です。のとキリシマツツジにも、このようなことがいえます。磨きをかけるというのは、みなさんが遠くからわざわざ人が来るような価値に結び付けることです。実はそれが一番お金にな

るというのがエコツリーリズムの考え方です。

進行役 濱 一博：

よく宝を生かすも殺すも…と言いますが、本当だったんですね。見せびらかすだけでお金になる、こんないい商売ないですね。

春蘭の里 実行委員会 中本安昭：

かつてオーナー制度をつくり、会員に15000円の会費を払っていただいて、春蘭を売ってみた。送り先を訪ねたところ、1年目はもっていましたが、その後は枯れた家が多かったんです。日本中の春蘭を春蘭の里に集めようと思ったこともありました。しかし、そうではないことに気づきました。その場所にあるから、実を結び、花が咲く。私たちのところに来て、そこにあるものを見てもらうことにした。春蘭の花が咲くには7年かかります。

協会コーディネーター 谷内博史：

第1分科会の昼食では、7年もかかる春蘭の花を惜しげもなく料理に使っていただき、食べさせてもらいました。価格（バリュー）、質を保つ（クオリティコントロール）。質が世界に通用するということです。春蘭の里は、助け合える人たちや役に立ちたいと思っている人たちがいます。そういう地域力がすごいと思いました。

協会コーディネーター 村本睦戸：

今まで男性の世界の中で、場所・もの・サービスの話がありました。人がキーワードということでやってきましたが、第4分科会の参加者はほとんどが女性でした。女性が一番いいのは情報発信力です。どうやって情報発信するか、煙たがられるほどやっていく。その姿勢が未来につながるのではないかと思います。福祉は人がどういうふうにして営みをするかを思いやっていくことだと思います。今まで地域づくり円陣は女性の数も少なく、福祉の分野で活動されていることで連携することはあまりありませんでしたが、ここでようやく一つの丸、円陣になってきたかなと思います。情報発信のほうでみなさん一緒にやっていければと思っています。

進行役 濱 一博：

私がやらなければならないのに、第4分科会の村本さんがうまくまとめてくださいました。ありがとうございます。最後に一言言っておきたい方はいらっしゃいますか？

コーディネーター 北野啓子：

第3分科会のツツジも、第4分科会の福祉も、どのテーマも少子高齢化のため継承が難しくなっています。一緒にお酒を飲むことによってつながることに大切さ、ふれあいが広がるということも聞きました。そして一番大切なのはふだんからの人とのつながりというキーワードが印象的でした。これからの仕事につながるなと感じました。

進行役 濱 一博：

ふだんのつながりが、光をあてるときにも、磨きをかけるときにも、未来につながるときにもベースになっているのではないかなと思って聞いていました。

コーディネーター 埴 正浩：

しゃべりたくてしょうがないです。…春蘭の里の話聞いていて思ったキーワードをご披露します。「産地から王国」。「産地」は「ものを出す、出荷する土地」。「王国」は「人が目指す土地」という意味。できたら能登に来て、美味しいものを食べてもらう、能登で楽しんでもらう、そういう王国を目指していただきたいと思います。

進行役 濱 一博：

まるで選挙に出るかのような発言でした。

民有「歴史文化」資産の保存活動を考える会 中：

このままでは帰れないです。中は論理的で行動しないという結論になっていますが…。

進行役 濱 一博：

いやいや、なっていないが。

民有「歴史文化」資産の保存活動を考える会 中：

論理的だけれど、自信がつけば行動する。そういう人もいるということで、よろしくお願いします。

進行役 濱 一博：

やってみながら、自分の論理を確かめるという手もありますから。

地域づくり円陣は毎年、開催地が変わりますが、何年後か戻ってきて、「あのときああいうふうに言っていたけれど、今はどうなんだ」と確認するのがいいと思います。能登会場に戻ってきますので、「私はこれができる」「春蘭の里を超えた」といった発表が聞けるようになっていたらいいなと思います。そのためには、皆さんと一緒に我々もやっていきたいと思っています。それではこれで終わらせていただきます。

(了)